畠山記念館蔵古筆切について

畠山記念館には、軸物仕立ての表装による古筆切が二十六点蔵される。いずれも伝来の素姓がよく、古筆切の中では一級品と言ってよいであろう。これらの切はすでに研究者によって調査済みのものもあるし、また大半は展示替えされた折に館から発刊される『展観会記』(年二回発行、既刊三十一冊)に順次掲載されてもいる。ただここでは、それらをまとめる意味で一括内容を紹介しておくことにする。配列は氏・姓を除いた伝筆者名の五十音順とし、作品の明らかなものについてはその旨を記しておいた。また寸法は、館にそなえつけられた台帳カードの記載に従った。他の切との関連、作品作容の考察等は別に稿を改めることとし、ここでは紹介するのを旨とした。なおこの調査にあたっては、畠山記念館の芥唯雄氏に何かとお世話になった。御配慮いただいたことを深謝申しあげる。(第一室　伊井春樹)

1 伝藤原顕輔筆　鶉切

古今和歌集巻第十九

雑体哥

短哥

題しらす　　よみひとしらす

あふことの　まれなるいろに　おもひそめ　わか身はつねに
あまくもの　はるゝ時なく　ふしのねの　もえつゝとはに
おもへとも　あふことかたし　なにしかも　人をうらみむ
わたつみの　おきをふかめて　おもひてし　おもひはいまは

※古今集巻十九、雑体、一〇〇一、8行、25×15㎝

2 伝藤原公任筆　藍紙本万葉集

反歌二首

許序能秋安比見之末尓末今日見波於毛
夜目都郡良之美夜吉(ママ)可多比等
こそのあきあひみしまにまけふみれは
おもやめつらしみやこかたひと
可久之天母安比見流毛乃乎須久奈久母
年月経礼波古非之家礼夜母
かくしてもあひみるものをすくなく
もとしつきふれはこひしけれやも

※万葉集巻十八、四一一七・四一一八、9行、24.5×20cm、重美指定

3 伝藤原公任筆　堺色紙

はるくれはや
とにまつさく
むめの花
君かちとせの
かさし
とそ
なる

※古今集巻七、賀、三五二、21.9×18.5cm

4 伝藤原公任筆　太田切

山水

泰山不讓土讓故能成其高河海不厭細
流故能成其深漢書
巴猿一叫停舟於明月峽之辺胡馬惚嘶
失路於黄沙磧之裏駱賓
礙日暮山青簇々浸天秋水白茫々白(紙継)
朝候日高冠額抜夜行沙厚履聲忙駢句
みかきもるゑしのたくひにあらねとも
我もこゝろのうちにこそ多遣
こゝにたにひかりさやけきあきの月
くものうへこそおもひやらるれ

古京

緑草如今麋鹿苑紅花定昔管絃家習三品
いそのかみふるきみやこをきてみれは
むかしかさしゝ花さきにけり

故宮付陵宅

陰森古柳疎槐春無春色獲落危牖
壊宇秋有秋聲連昌宮賦
鼇頭滑石猶残砌簾断真珠不満鉤白
強呉滅今有荆棘姑蘇臺之露濃々
暴秦衰今無虎狼咸宮之煙片々河原院賦
老鶴従来仙洞駕寒雲在昔妓樓衣若
孤花裏露啼残粉暮鳥栖風守癈籬
※和漢朗詠集、巻下、23行、25.5×58.6cm、重美

5 伝藤原公任筆　大色紙

よろつよのまつ
にそ君をいのり
つる
千とせの影にすまむと
おもへは

※古今集巻七、賀、三五六、20.5×17.5cm

6 伝小大君筆　香紙切

みやきのゝはきのふるねに春まつと
をりしうくひす今日やなくらん
　　ものおほしけるに

※麗花集　3行、21×12cm

7 伝西行筆　歌切

（消息略）
　　左大将
ほとゝきすみちにやあふと
こよひさは春のをくりにせきやこへ
　　まし

まちかねてあくかれいてはほとゝ
きすちかひてやとにもしやきなかむ

夜をこめてこまにくらをけ
ほとゝきすはつねきつゝとおやに申さ
　　む

8 藤原定家筆　詠草切

　　定　家
あきよたゝなかめすてゝもいてなまし
このさとみのゆふへとおもはゝ
　　（別筆）なかめすてゝの詞肝心云々

※捨遺愚草（九三七九）に「秋夕」として見える。別筆は俊成かとする。4行、31×22.5cm

9 藤原定家筆

関屋
　つくはねの山をふきこす
　風もうきたつ心ちして
　　可尋

　こひそつもりてふちとなりける
此歌不叶此心
峯のもみちはおちつもり
　又不叶

※奥入　8行　16.5×34cm

10 伝藤原定信筆　戊辰切

山家

遺愛寺鐘欹枕聴香鑪峰雪撥簾看 白

蘭省花時錦帳下盧山雨夜草庵中 白

漁父晩船分浦釣牧童寒笛倚牛吹 杜荀鶴

王尚書之蓮府麗則麗恨唯有紅顔之賓稽

仲散之竹林幽則幽嫌殆非素論之士 皆三

南望則有関路之長行人征馬駱驛於翠

簾之下東顧亦有林塘之妙紫鴛白鷗逍遙

於朱檻之前 頌

山路日落満耳者樵哥牧笛之聲澗戸鳥帰

遮眼者竹煙松霧之色 斉名

花間覓友鶯交語洞裏移家鶴卜隣 紀

晴後青山鷗驚近雨初白水入門流 都

鰐石春雲生枕上銜嶺暁月出窓中 直幹

やまさとはものさひしかることこそあれ

よのうきよりはすみよかりけり

※和漢朗詠集巻下、山家、16行、28×36.5cm

11 伝藤原定信筆　戊辰切

山さとは冬そさひしさまさりける

ひとめもくさもかれぬとおもへは 宗于

※和漢朗詠集巻下、山家、2行、29行、29×3.5cm、10と同筆

12 伝寂蓮筆　右衛門切

いせ

見る人もなき山さとのさくら花

ほかのちりなむのちそさかまし

※古今集巻一、春上、六八、3行、20×14cm、墨の枠罫

13 伝寂蓮筆　右衛門切

いし山のてらにまうてけ

るときをとは山のもみちを

見てよめる

つらゆき

秋風のふきにしひよりをとは山

みねのこすゑもいろつきにけり

※古今集巻五、秋下、二五六、6行、20.5×14cm、墨枠罫

14 伝寂蓮筆　右衛門切

みのほとをおもひしりぬることの

のみやつれなき人のなさけなる覧

右衛門督家成かつのくにの

山庄にて旅宿恋といふ

ことをよめる

わひつゝもおなしみやこはなくさ

めき

※詞花集巻七、恋上、二〇八・二〇九（上句）
6行、22×15㎝、墨枠罫

15伝藤原佐理筆　賀歌切

夜萬新難乃也萬能
以盤祢耳萬都乎有
懸傳東豈顔可幾盤
児移里越蘇数類（ママ）
※拾遺集巻五、賀、二七三、4行、27.5×16㎝

16伝紀貫之筆　寸松庵色紙

きの□□□り
たかためのに□
きなれは□
□きりのさ□
の山へを□ちか
くす覧
※古今集巻五、秋下、二六五、12.9×12.8㎝、重文

17伝紀貫之筆　名家家集切

老

さかとのゝおほみきのついてに
ともたちにあひくるとしをかそふれはわれ
はおきなになりそしにける
ゆきのあしたおいをなけきてつらゆきかもと
よりおこせてはへるうたのかへし
あさゆふにみちはそへともあらたまのとし
つもりゆくわれそわひしき
いのちあらは〳〵とおもふまにみの
ゆくすゑをたれかしるらん

懐旧

こ式部卿宮のすみたまし（ママ）四条宮にていまの
みやむつきにあるしゝたまひけるに　」
きみかなんみやもむかしのしかなからかは
れるものはとしにそありける

衣

ふちはらのさねきかくらひとにてあすか
うふりたまはらむとしけるよさけ
たうへけるついてに
むはたまのこよひはかりそあけころもあ
けなはきみをよそにこそみめ
をむなのくちなしいろのきぬをきかへたる
かへしはへりとて

かたらへといふくちなしのいろもなくたてる
ころもはかひなかりけり
※兼輔集　一面13行・27×45㎝

18伝紀貫之筆　名家家集切
髪
くろかみのいろふりかふるしらゆきのまち
つるともはうとくそありける
　つらゆきかもとよりあるうたのかへし
としことにしらかのかすをますかゝみゝつゝそ
ゆきのともはしりける
子
※兼輔集　7行、26・5×14.5㎝

19伝源俊頼筆　巻子本古今集切
　寛平御時のきさいの宮の哥合に
　　きのとものり
さみたれニ鬼思居は
　ほとゝきすよふかく
なきていつち行蓋
夜やくらき
　道やまとへる
　ほとゝきす我やとを霜
※古今集巻三、夏、一五三、一五四、8行、22.5×19㎝、唐紙胡粉亀甲文

20伝源俊頼筆　古今集切
　くものいとすち
　　遍照
名にめてゝをれる許そ女郎花
我落にきと人に語るな
　遍照か許に奈良に罷とて男山
　にて女郎花見て
　　古今(イ)道
※古今集巻四、秋上、二二六、二二七（詞書）7行、22.5×14㎝、唐紙

21伝伏見天皇筆　筑後切
　　大中臣能宣
すみそめのいろは我のみと
おもひしをうき世をそむく
人もあるとか
かへし

読人不知

すみそめのころもとみれは
よそなからもろともにきる
いろにそありける

成信重家等出家し侍けるころ

左大弁行成かもとにいひつか
はしける（成信従四位上右近中将 長保二年二月三日出家　重家従四位下左近少将）

右衛門督公任

おもひしるひともありける
世のなかをいつをいつとて
すくすなるらん

少納言藤原統理にとしころ契
こと侍けるを志賀にて出家し
侍ときゝていひつかはしける

さゝなみやしかのうらかせ
いかはかりこゝろのうちの
すゝしかるらん

女院の御八講の捧物にかねして
かめのかたをつくりてよみ
侍ける

斎院（選子）

こふつくすみたらしかはの
かめなれはのりのうきゝに
あはぬなりけり

天暦御時故きさいの宮の
御賀せさせ給はむとて侍けるを
宮うせ給にけれはやかてその
まうけして御諷誦をこな
はせたまひける時

御製

いつしかときみにと思し
わかなをはのりのみちにそ
けふはつみつる

為雅朝臣普門寺にて経供養し侍て
又のひこれかれもろともに帰
侍けるついてに小野にまかりて
侍けるに花のおもしろかりけれは

春宮大夫道綱母

たき木こることはきのふに
つきにしをいさをのゝえは
こゝにくたさむ

左大将済時白河にて説経せさせ侍
けるに

実方朝臣

今日よりはつゆのいのちも
おしからすはちすのうゑの
たまとちきれは

をこなひし侍ける人のく
るしくおほえ侍けれはえをき
あかり侍らさりける夜の夢に
をかしけなるほうしのつきを
とろかしてよみ侍ける
あさことにはらふちりたに
あるものをいまいくよとて
たゆむなるらむ

※拾遺集巻二十、哀傷、一三三三―一三四一、28×175㎝、打曇鳥の子紙、重美

22伝飛鳥井雅経筆　今城切

まくらよりあとよりこひのせめくれは
せむかたなみそとこなかにをる
こひしきかゝたもかたこそありときけ
たてれおれともなきこゝちかな
ありぬやとこゝろみかてらあみねは
たはふれにくきまてそこひしき
み、なしのやまのくちなしえてしかな
おもひのいろのしたそめにせん

※古今集巻十九、雑体、一〇二三―一〇二六、8行、25×16㎝

23伝小野道風筆　継色紙

きみをおき
てあたしこ
ころをわ
かもたは
すゑの
松山
なみも
こえな
む

※古今集巻二十、大歌所御歌、一〇九三、13.7×11.6㎝重美

24伝藤原行成筆　歌切

かひのこゑをきゝはへりて
山風に吹るゝかひのこゑなくはねさめのとき
をたれかつけまし
くまのまうてのみちにやとりてゆきにふりうつ

もれはへりて
かひかねにつもれるゆきはみしかともおのかうへとは
おもはさりしを
ゆきのうちに冬つきぬといふこゝろを
ゆきのうちにおほくの冬をすくしつゝわかみもい□
は□しのしら山
※10行、21.5×14.5㎝

25伝藤原行成筆　升色紙
たちなからみむ
あきゝりのたゝすもあらなむ
あしひきのやまの
にしきを
※深養父集　4行、13.7×11.6㎝重美

26伝藤原行成筆　関戸本古今集
たてはうつろふいろにひとな
らひけり
たいしらす
はるのいろのいたるいたらぬさとは
あらしさけるさかさるはなのみ
ゆらむ

※古今集巻二、春下、九二（下句）、九三、6行、20.5×11㎝、重美